

平安和文の役柄語(二)

登場人物のセリフの特性

関 一 雄

はじめに——「平安和文の役柄語(一)」に関連しての補足

物語文学の会話文は、物語という舞台に登場してくる人物(役者)が相互に交わし合うセリフであり、地の文が描き上げる人物の動き(演技)と情景(背景)とそれらの時間の流れの中で、語り手によってすべてが表現する。『源氏物語』に登場してくる人物の多くは貴族であり皇族である。その人物の多くが発するセリフは、「侍り」「給ふ(下二段)」などの謙讓語や命令・意志・願望等の表現を除けば、地の文とほぼ同じである。しかし、『源氏物語』に見られるごとく、貴族社会から疎外されがちな庶民(「しもびと」)であっても、その物語に無くてはならない人物も少なからず登場するのが平安物語である。『竹取物語』の「翁」もその一人であるが、賤民の「翁」が漢文訓読とは、およそ無縁の「漢文訓読語」を用いていること理由は「漢文訓読語」と言われてきたものの中には「漢文

訓読語」として、日本語の中に加わったものもあつたには違いなからうが、逆にもともと日常的用語として使われていたものが、漢文訓読の際に用いられたものもあつたとしても、いささかも不自然ではなく、「竹取の翁」のそれは、後者の「漢文訓読語」をそのキャラを表すにふさわしい語として物語作者によって意図的に選ばれたものである。

『源氏物語』の言葉が、日常的用語でないことは、夙に先学の説くところである。日常的用語は、会話文に多く使われるとしてよかるうが、ここに後者の「漢文訓読語」が、用いられることがあつたとするのが、本稿で改めて主張したいところであり、「平安和文の役柄語(一)」*では、「そもそも」「はなはだ」「ただし」「すみやかに」「もはら」などの接続詞・副詞を採り上げて、「役柄語」の実例を分析した。「役柄語」は、平安時代の日常的用語の追求のために用いる仮称であり、その為に、狭義の物語文学の用語に止まらず、『土左日記』『更級日記』等の用語も考察の対象とする。

役柄語Ⅱ『竹取物語』『うつほ物語』『落窪物語』『源氏物語』等の

地の文には使われず、会話文に限って使われる語。会話主体が日常的に用いたであろうとされる用法(キャラ語と仮称)と、普段は日常には用いない主体が様々な緊張した場面で、強い語気・語調で、意図的に発する用法とがある。

前者は、主として身分の下位の者が、上位の聞き手に使うもので、場面によっては畏まり(卑下謙遜)に近い意味合いを帯びることがある。後者は、上位の者が下位の者を叱責する意味合いを帯びることもある。

二 動詞・名詞類について

おそる

『うつほ物語』

○(忠達→正類)「略」学問に疲るるをば、一度の職行ふおそれて、つかれふすることなし。跡を絶ちて籠りはべる学生なり」

(祭の使①四九七ペ)【『新編日本古典文学全集』による。以下同じ】
『源氏物語』

○(内舎人→右近)「略」用意して候へ、便なき事もあらば、重く勤当せしめ給べきよしなん仰事侍つれば、いかなる仰せ事にかとおそ

れ申はんべる」(浮舟 〱五〱二四八ペ)

【『新日本古典文学大系』による。以下同じ】

『うつほ物語』の例は、下位の者が上位の者にいうセリフで、キャラ語である。『源氏物語』の例は、内舎人という下級役人のセリフに用いられている。聞き手の右近との上下関係は明確にはし難いが、このセリフにより、物語中での異様な場面を作り出したものと考えられそうである。これを聞いた浮舟の侍女右近は、「梟の鳴かんとおも、いと物恐ろし」とおびえるのである。

この「おそる」は、『大和物語』の地の文で次のように使われている。

●近江の守、(帝ガ)いかにきこしめしたるにかあらむと歎き恐れ、(略)帰らせ給ふ打出の浜に、世の常ならずめでたきかり屋どもをつくりて、菊のはなのおもしろきをうへて、御まうけつかうまつれりけり。国の守もおぢ恐れて、ほかにかくれをりて、たゞ黒主をなむすへ置きたりける。

(一七二段三四五ペ)【『日本古典文学大系』による。】

「歌物語」の一つとしての『大和物語』が、歌に関わる口承性を有する素材を淵源として成立したと考えられるなら、「おそる」は、当時の日常的用語であり、『うつほ物語』『源氏物語』ではキャラ語として用いたと説明できよう。その一方で、前掲の『大和物語』で「おぢ恐れて」と用いた類義の具体動作語動詞「おづ」を『うつほ物語』『源氏物語』では地の文で用いることにより、登場人物の動

き(演技)を描き上げたと考えるのである。^(注)

なお、『古今和歌集仮名序』『枕草子』の地の文にも「おそる」が見えるが、四段活用のものであるので、同一には扱えない。

いぬ

『源氏物語』

○(光源氏預かりの子)「紙燭さしてまいれ。「隨身も弦打ちして絶えず声づくれ」と仰せよ。人離れたところに心とけていぬるものか。(略)「夕顔へ」(一二三ペ)

『更級日記』

○あか月、夜ぶかくいでて、えとまらねば、奈良坂のこなたなる家をたづねてやどりぬ。これもいみじげなるこいゑ也。「こゝはけしきある所なめり。ゆめいぬな。れうがいのことあらむに、あなかしこ、をびえさはがせ給な。息もせで、ふさせ給へ」と云ふを聞くにも、(四二二ペ)【新日本古典文学大系】による。以下同じ)『源氏物語』と『更級日記』では「いぬ」は会話文にのみ用いられているが、『枕草子』では、地の文に用いられている。

●ア思はん子を法師になしたらむこそ心ぐるしけれ。たゞ木のはしなどのやうに思ひたるこそいとをしけれ。精進物のいとあしきをうちくひ、いぬるをも、(四段八ペ)

【新日本古典文学大系】による。以下同じ】

●イいたくふけて、御前にもおほとのごもり、人ぐみなねぬるの

ち、外のかたに殿上人などに物などいふ。奥に、碁石の筈に入るゝをとあまたゝび聞ゆる、いと心にくし。火箸をしのびやかについ立つるも、まだおきたりけりと聞くと、いとをかし。

猶いぬぬ人は心にくし。人のふしたるに、物へだてて聞くに、夜中ばかりなど、うちおどろきて聞けば、おきたるななりと聞えて、いふことは聞えず、男もしのびやかにうち笑ひたるこそ、なにごとならむとゆかしけれ。(一八九段二四一ペ)

『更級日記』の会話文の例は、前半部分に、敬語が無く、後半には「させ給ふ」と高い敬語表現がなされている。従って前半はお供の頭が部下の者に言い、後半は作者に言うセリフと見なされる。要するに身分の高くない者の日常的用語と見て良からう。それを、『源氏物語』では、光源氏に使わせている。ここは、魔性の女の出現と、夕顔の死の直前で、光源氏の周章狼狽した情景を、彼が通常のセリフでは用いない「いぬるものか」へ寝床ニ就イテモ眠ッテハナラヌを、敢えて使わせたと考えられよう。『更級日記』の「ゆめいぬな」と同義である。

「ぬ」と「いぬ」の意味差は、ともに地の文に用いた『枕草子』の例でも、明白である。●イの「ぬ(ね)」は、中宮(御前)の「おとのごもる(り)」へ御寝室ニオ入りニナル(り)へに対応する無敬語の表現(寝床ニ就く)である。その後続文で、「猶いぬぬ人は心にくし。」とある。ここは、それに更に続く文で分かるように、男女の同衾を意味する一句である。「いぬぬ」へ寝床ニ就イテ眠ラナ

イ)の表現により、情景描写が詳細になされていく。前後するが、
 ●アの「精進物のいとあしきをうちくひ、いぬるをも」は、〈精進物ノ大變マズイノヲパットロニ入レ、寝床ニツイテ眠ルノモ〉という簡潔にして詳細な情景描写である。

きたる

『うつほ物語』

1 (阿修羅↓俊蔭) 「略」いかに思ひてか、人の身を受けて、汝がここに来たれる。すみやかにそのよしを申せ」(俊蔭 ①二五ペ)

2 (阿修羅↓俊蔭) 「略」たはやすく来たれる罪だにあり、いはむや、そこばくの年月、なで生ほし木づくる。(略)といひて、(俊蔭 ①二七ペ)

3 (仙人↓仙人) 「日本の人、蓮華の花園よりとて来たれば、その乳房の恋しきになむ。(略)」(俊蔭 ①三三ペ)

4 (仙人↓俊蔭) 「おのれは、天上より来たりたまひし人の御子どもなり。(略)」(俊蔭 ①三三ペ)

5 (真菅↓嬬) 「はや来たれ」(藤原の君 ①一八六ペ)

6 (藤壺↓祐澄) 「これを持って来てすなはちなむ、さはいひに来たりし。これを心一つに思ふなむ、いみじう悲しき」(蔵開上 ③四一二ペ)

『源氏物語』

○(光源氏) 「紙燭さしてまいれ。」「隨身も弦打ちして絶えず声づく

れ」と仰せよ。人離れたるところに心とけて寝ぬるものか。惟光の朝臣の来たりつらんは」(夕顔 ①一二三ペ)

『うつほ物語』の1と2は、身分の低い者のセリフで、キャラ語である。ただし、この場面では阿修羅は聞き手の俊蔭を見下ろして言う場面で、「きたる」は聞き手の動作について使われた用法であるから、語気を強めるためのものでもあると、見られよう。5の真菅のセリフについても同じようなことが言える。6は女性が用いた例である。藤壺が同母兄の祐澄に亡き兄、仲澄の訃報の届いたことを「さはいひに来たりし」と言っているのである。「さはいひに来し」では表せない語気を「来たりし」に込めたと考えられよう。

『源氏物語』の「来たり」は、通説では「来+たり(助動詞)」と説明されているが、前項「いぬ」の例と同じく異常で緊張した場面での用法と見てよいのではないか。

ここで、「ぬ」と「いぬ」、「く」と「きたる」の相違について、改めて検討して見る。通説ではそれぞれの前者は和文語、後者は漢文訓読語という文体・位相の相違として捉えられている。しかし、「ぬ」の実際の使用例を見ていくと、〈寝床デ横ニナル〉〈同衾スル〉〈寝床ニツイテ眠ル〉などの意を文脈に応じて表すところのいわゆる多義語である。これに対し「いぬ」は、〈寝床ニツイテ眠ル〉という意味に限定して用いられる。前者を「具体動作語動詞」と呼ぶなら、後者は「限定動作語動詞」とでも呼ぶべき意味差で捉

えられるべき性格のものである。次に「く」と「きたる」では、後者が〈到着スル・到来スル〉の意を表すのに対し、前者はその意を表すこともあれば、〈近づく〉〈帰ル〉〈戻ル〉〈行く〉などの様々な意を文脈に応じて表す多義語である。もともと、日本語の動詞（精確には単純動詞）の大半は、多義語であるとしてよからう。「限定動作語動詞」と仮称した「いぬ」は「い（睡眠）＋ぬ」の、「きたる」も「き（来）＋いたる（到る）」の複合語である。物語の地の文や貴族のセリフでは、「いぬ」を「ねいる（寝入る）」「敬体は「大殿籠り入る」」、「きたる」を「きつく（来着く）」「敬体は「おはし（まし）着く」のように、具体動作語同士を複合する方法により、目に写り、耳に聴こえる動作を相乗効果的に表したと考えるのである。

あざける

『源氏物語』

○（近江君↓柏木）「略」中將の君ぞつらくおはする。さかしらに迎へたまひて、軽めあざけり給ふ。少々の人、え立てるまじき殿のうちかな。あなかしこ〜」（『行幸』三二八二二）

「あざける」は、平安和文には用例が少ないが、右の例のように、近江君のセリフに使われている。

また、『更級日記』の地の文には、

●「あれはなぞ、く〜と、やすからずいひおどろき、あさみわら

ひ、あざける物どももあり。（四一九）

【新 日本古典文学大系】による。

のように使われており、「いぬ」の『源氏物語』―会話文、『枕草子』―地の文の使用法と似ている。ただし、かれが同時代の作品の用語であるのに対し、これは、少し時代が下って、（和文の）地の文にも使われるに至ったというところでの相違を考えて見なければならぬ。これまで述べて来たように、『うつほ物語』『源氏物語』等の会話文には、地の文に用いることを敢えて避け、登場人物のキャラを表すために当時の日常的用語を意図的に用いたとおぼしき例が見られた。「あざける」は、その典型的例とも見られる。次の「かうぶる」もしかり、である。^注

かうぶる

『うつほ物語』

○（三春高基↓あて宮）「略」ここにはうしろめたき人も侍らず、ただ高き山とのみ頼み聞えてなむ。必ず御かへりみかうぶらむ。さてこれはいとなけれど、御方の下仕へらにも賜はせよとなむ。」

（祭の使 ①四八三）

『源氏物語』

○（近江君↓内大臣）「山とうたは、あし〜もつゞけ侍なむ。むねく〜しき方のことはた、殿より申させたまはば、つまごえのやうにて、御徳をもかうぶりはべらむ」（『行幸』三二八四）

『うつは物語』の例は、会話に準じる消息のもので、消息の書き手の三春高基は、帝の落胤である。御落胤ではあっても、あて宮に対しては、下位の立場からの言葉である。『源氏物語』の例は、近江君が父の大臣に申し上げるセリフで、ともにキャラ語である。

さづく

『源氏物語』

1 (僧都↓浮舟)「略」御忌むことは、いとやすくさづくたてまつるべきを、急なることにまかんでたれば(略)七日はててまかでむに
仕まつらむ」(手習 へ五)三六四(ペ)

2 (薫↓僧都)「(略)かの山里に知るべき人の、隠ろへて侍るやうに聞き侍りしを、(略)御弟子になりて、忌むことなどさづけ給ひてけりと聞き侍るは、まことか。(略)」(夢浮橋 へ五)三九三(ペ)

この語は吉田金彦・築島裕他編『訓点語辞典』(二〇〇一年)の「訓点語彙」の一項で取り上げられ、「何れも僧侶関係の会話の中に出て来るものである。」とある。薫は、僧侶ではないのだから、「《「忌むこと」の述語として「さづく」が会話語として用いられたもの》と考えるべきである。「やる」「つかはす」「たまはす」が、多義語(前述の「具体動作語動詞」)であるのに対し、「さづく」は、一義的語(前述の「限定動作語動詞」)であり、日常的用語が漢文訓読の際にも用いられたと考えられる。

さふじ

『源氏物語』

1 (博士の娘↓式部丞)「月ころ、風病重きに耐えかねて、極熱の草葉を服して、いと臭きによりなんえ対面たまはらぬ。目のあたりならずとも、さるべからんさう事はうけ給はらむ」

(帚木 へ一)五八(ペ)

2 (内舎人↓右近)「殿に召し侍りしかば、けさまいり侍て、たゞいままんまかりかへりはんべりつる。さうじども仰られつるついでに、(略)」(浮舟 へ五)二四七(ペ)

3 (里人)「古八の宮の御むすめ、右大将殿の通ひ給し、ことに悩み給こともなくてはかに隠れ給へりとしてさはぎ侍、その御葬送のさうじども仕うまつり侍りとて、昨日はえまいり侍らざりし」

(手習 へ五)三三一(ペ)

1の例で、博士の娘であるから、「さふじ(雑事)」のほか「風病」「極熱」「草葉」などの漢語を用いることがあったのだ、と説明されるのは、必ずしも肯定できない。

「さふじ」について、2・3の会話主についても考えを致さねばなるまい。2は、「おそる」の項で説明したと同じことが言えよう。聞き手の右近に異様に聞こえるキャラ語として内舎人に使わせたと考えられる。3は里人のキャラ語として用いている。

まなこ

『土左日記』

○(ある人↓構取)「まなこもこそふたつあれ。たゞひとつあるかゞみをたいまつる」(二月五日 五二一ペ)

【『日本古典文学大系』による。】

『竹取物語』

1 (世間の人)「(略)みまなこ二に、李のやうなる玉をぞ添へて、いましてる」(竜の頸の玉 四一四一ペ)

【『新 日本古典文学大系』による。以下同じ】

2 (翁↓かぐや姫)「御迎へに来む人をば、長き爪して、まなこをつかみつぶさん。(略)」(かぐや姫の昇天 六七七ペ)

『土左日記』の一例は、「目」と言っても分かるところを「まなこ」眼球」という一義的語を用いた用法である。

『竹取物語』の「まなこ」の例は1・2の例のように身分の低い者のセリフに用いられたキャラ語である。これに対し、ほぼ同義とみられる「め(目)」「は、」竜の頸の玉」の地の文に、

●(大納言)「風いと重き人にて、腹いとふくれ、こなたかなたの目には、李を二つつけたるやう也。(三九九ペ)

とあり、1の世間の人のセリフの箇所に対応する。また、地の文の他の二例は、

●(中納言)「御目は白目にて臥し給へり。(燕の子安貝 四七七ペ)

●(翁)「此事を嘆くに、鬚も白く、腰もかゞまり、目もたゞれに

けり。(かぐや姫の昇天 六四四ペ)

とあって、この会話文での「まなこ」の用法は明らかに作者による意図的なものである。^(注)

ただ、『うつほ物語』の「まなこ」と「目」にはこのような明確な相違は見られず、「役柄語」の使用法は物語作者の間で必ずしも共通のものであったとは言い得ない。

注

1 「おづ」については拙稿のいくつかで採り上げたが、拙著『平安時代和文語の研究』(一九九三年)を参照いただきたい。ここでは、『大和物語』の用語の性格について、補足する。今井源衛『大和物語評釈下巻』(二〇〇〇年)に、『大和物語』の文学的母胎を口承の「歌語り」の世界とし、或いは「異伝」であると見る見解は今日甚だ有力であるが、それはこのような『伊勢物語』から『大和物語』への書承の契機を不用意に見逃す危険を常にはらんでいる。この物語の理解を志すには、口承・書承の両面を通じて、史実・伝承・虚構という種々の次元から、複眼を用意して柔軟に研究を進める必要があるに思う。(二九九ペ)とあるのは、口承性と日常的用語とを関連づける本稿の筆者への警告をも含んでいると受け取れるので、『大和物語』の用語の性格づけには周回な検討を要すると考える。ただ、口承という性格も一面では認められるとすると、同書上巻(一九九九年)に、「会話の前後に同語が反復される例」として、

立てりていひける、「世の中の(略)」といひけり。(六十四段)

かくてのたまへりける、「かの廂に(略)」とのたまへりければ、

(百四十段)

うかれめばらの申すやう、「大江の玉淵が(略)」と申しければ

(百四十六段)

仰せたまふやう、「玉淵は」とおほせたまひけり(同)

親のいふやう、「誰もみな(略)」といふ時に(百四十七段)

男にいひけるやう、「津の国と(略)」といひければ(百四十八段)

のような会話の引用を例示される(同書三一四べ)のは、注目される。

この用法は、「はじめに」にも述べた『竹取物語』に共通するものであり、『竹取物語』のものが漢文訓読にあるとする通説に間接的ながら否定的根拠となるものであろう。

2 「軽めあざけり給ふ」の後の「少々」は、光源氏のセリフにも「(略)少く殿上人におとるまじ」(蜚三三四べ)とあり、男性用語を近江の君が使っているとの指摘もなされるほか、

(内大臣)「いづら、近江の君、こなたに」と召せば、「を」と、けざやかに聞こえて出で来たり」(行幸三三八三べ)の「を」という応答詞も普通は男性の用いる言葉と考えられる(拙稿『源氏物語』の会話文の一面)へ「梅光学院大学・女子短期大学部 論集」36号二〇〇三年)。

このように、近江の君のセリフは、『源氏物語』に登場する他の姫君とは違って異常に過ぎる。この点については、五島和代「近江の君の言語」(『北九州大学文学部紀要』48号一九九三年)の詳細な記述の中に、「申す」に關わって、

近江君が父大臣に「申す」のは娘が父に言う体ではなく、女房が主人に申し上げる体の表現である。彼女の意識は娘ではなく女房である、ということこそこの「申す」は示している。

とあるのが、注目される。

3 この用法については、拙稿『竹取物語』の用語と表現——「敬語」「和文語」「漢文訓読語」をめぐって——(『筑紫語学論叢』二〇〇一年)所

収)で、副題に示した内容で詳述したが、ここにその一部を繰り返した。

今後の課題——「おわり」にかえて

「役柄語」という学界になじまない術語を敢えて表題に掲げて論じてきたが、本稿はもとより文学研究ではなく、文学作品の中から当時の日常的用語を探り出そうとする試みのひとつに過ぎない。

日本語史の研究が、豊富な資料の研究や方言からのアプローチによって、マクロにもミクロにも進展しているのは、歓迎すべき事柄ではあるが、既定の概念・通念を一度は疑って見ることも無駄な作業ではない、と考えるのである。

『竹取物語』から始まって『源氏物語』に至るいわゆる作り物語に登場する皇族・貴族・庶民などの人物のセリフは、平安時代の現実社会において身分を越えて共通する日常の会話を基本的に反映するものであるという前提のもとに、いわゆる「漢文訓読語」は、物語の中では身分の相違を表す用法もあったとする一見矛盾するかのような観点から論述してきた。

繰り返しになるが、『竹取物語』の「翁」のセリフが、『漢文訓読語』であることは何故か、という素朴な疑問を起点としている。

「漢文訓読語」「和文語」という通念から解放されることにより、すでに論じ尽くされたかの感もある中古・中世の文学作品の「会話

文」の用語を、根本から見直していきたい。

* 「平安和文の役柄語（一）」（『日本文学研究』（梅光学院大学日本文学会）

第四三号（二〇〇八年一月）に掲載